

巻頭言

「展覧会と画集」

理事長 新谷友良

明けましておめでとうございます。皆さま、良いお年を迎えられたことと思います。今年もよろしくお祈りします。

11月末に、久しぶりに良い展覧会と出会いました。東京国立近代美術館で開かれていた「鏑木清方 幻の《築地明石町》特別公開」。高額購入の話題もあり、土曜日なので混雑していることを覚悟して行きましたが、意外に人が少なくゆっくりと「築地明石町」を鑑賞することができました。

学生るとき、何かの拍子に絵の話になり、「ユトリロが好き」と言ったら、友人から軽蔑の目で「パリより東京！ユトリロより鏑木清方！」と断言されました。風景画に美人画で文句をつけられてムツとしましたが、きつかった友人の言い方が「呪いの粉」になったのか、だんだんユトリロへの興味が薄れました。今画集を見ると「昔はこのような絵が好きだったのか」と醒めた思いがしますが、かたや鏑木清方へは年ごとに愛着が増し、「美人画は上村松園と鏑木清方」と思いを定めています。

展覧会で記念の画集を買うことはめったにありませんが、今回は展示の雰囲気が大変良かったので気分も高まり、記念画集「鏑木清方原寸大美術館」を購入しました。素晴らしい画集です。「築地明石町」が44年間も所在不明であったことや「新富町」「浜町河岸」も同時に発見されたことなど、興味深い多くの記事がありました。それにも増して、「築地明石町」の写真には、見返り夫人の左手薬指に細かな彫金の施された指輪があり、背景の白地には実物を見ては気付かない帆船が浮かんでいました。重要文化財「三遊亭円朝像」の原寸大4枚の写真には、円朝が話し始める前の微妙な間が写っていました。

この画集は、「すべての掲載作品を本書のために同じ条件下で撮り下している」と説明されていて、各作品の原寸大や200%大の写真が満載されています。また、そのために「本来、他の美術館に所蔵されている優れた作品も収載すべきところ、自由な写真撮影が可能な近代美術館所蔵の作品のみで構成した」という趣旨の説明が加えられています。「鏑木清方原寸大美術館」の編集方法はきわめて明快、「清方の作品の魅力は細部に宿る。原寸での紹介は、これまで所蔵者や学芸員にしか許されていなかった至近距離での観察を疑似体験させてくれるだろう」と序文に載せた東京国立近代美術館主任研究員の鶴見香織さんに大拍手です。